技術開発に望むこと

専務取締役
坂本　央人

技報６巻１号の発行に当たり一言ご挨拶申し上げます。

現下の厳しい経済環境の中で、需要業界といわず、我々特殊鋼業界、鉄鋼流通業を含め全ての段階で「優勝劣敗」の選択が行われつつあります。

こうした企業の存亡をかけた状況下で、我が国の特殊鋼部門の研究は如何にあるべきか営業担当の立場から一言述べてみたいと思います。

同じ材料メーカーの一つである化学の世界をみるに、日本と欧米の企業格差の指摘がよくなされます。

日本では国際的にみれば中小規模の企業が乱立し、競争があまりに激しく、ユーザーサービスに多大のエネルギーを費やしている間に、欧米の巨大企業はより基本研究に力点を置いて、次なる技術を準備し、経営的にもその存立基盤を極めて強固なものにしています。

又鉄鋼はとみると、米国では研究開発、管理等を極端にスリム化したミニミルの比重が増加し、高炉メーカーと言えども殆ど研究部門を放擲した感じさえあります。一方ヨーロッパは熾烈な域内競争の結果、メーカーの統合が進み、少数の高炉メーカーと専門性を究めた、少数の特殊鋼メーカーの存在が目立ちます。

幸いにして日本では特殊鋼専業、高炉メーカー群も優れた研究部門を死守していますし、需要業界からも期待が高まりこそすれその期待が低下するものではありません。

「技術の優位性発揮なくして販売を伸ばすことは、この業界ではありえません。」

問題は乱立気味の業界の中で、どの領域を戦略的見地として選択するか、どのテーマを明日の糧にするかということです。研究には時間がかかります。市場の変化の基軸が何に依って進むかをしっかり見つめなくてはなりません。成熟型になりつつある特殊鋼需要の中は勿論のこと、環境、変化しつつある情報伝達システム、資源分野等々で、特殊鋼開発の中でこれまで培われた特徴ある我が社の技術基盤に期待されているところ極めて大きいものと日常感じている次第です。

従来の材料メーカー・ユーザーの関係ではとらえられない複合領域が急速に進展していることを痛感しています。当社の研究にも各所にその成果が出つつあります。大いに研究陣にはばたいて戴きたいと思います。需要家の皆さんのふところへ飛びこんでくれるよう、期待しております。

末筆になりましたが、今後共需要家の皆さんに我々研究陣に対する御協力御指導を宜しくお願い申し上げます。